様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　４ 月 ３０ 日現在

機関番号：１５５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０４７９３

研究課題名（和文）アジアの芸術教育におけるグローバル化と国民文化形成

研究課題名（英文）Globalization and the Formation of National Culture Viewed thtough Arts Education in Asia

研究代表者
石井　由理（Ishii, Yuri）

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：７０３０４４６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、アジア各国における国民文化形成におけるグローバル化と伝統文化の関係を明らかにした。音楽分野では、台湾、韓国、シンガポール、インドネシアにおけるカリキュラム分析とアンケート調査をとおして、学校教育では普遍的なものとして西洋音楽理論を学ぶ一方、独自の国民文化はそれぞれの歴史的、社会的背景によって異なり、若者の認識もまた各国で異なることが明らかになった。美術分野では、上記に加えてベトナム、マレーシア、中国を事例として、福田の唱える近代美術の四層構造(民族の伝統文化、西洋文化の影響、近代美術とデザインの国際様式、現代美術）に当てはめて分析し、各国におけるそれぞれの層の出現のあり方を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
グローバル化時代に対応した教育は多くの国で唱えられていることであるが、英語教育やICT教育が普遍的に必要なものとして共通理解される一方、グローバル化のもう一つの側面である独自文化の継承に関する各国の取り組みについては、教育内容や当事者の認識にまで踏み込んだ研究は乏しかった。本研究では、芸術教育に焦点を当てることによって、普遍的とされる西洋近代を取り込んだアジア各国が、何を国民文化とし、学校教育をとおしてどのように次世代に伝えようとしているのかを、一次資料に基づいて明らかにした。国民文化の捉え方には日本とは異なる選択肢が存在することを明確にした点に、本研究の学術的、社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study explored the relationship between cultural globalization and traditional culture in the formation of national culture in Asian countries. In the field of music education, the analysis of the national curriculum in Taiwan, South Korea, Singapore and Indonesia and questionnaire-based research on young people's perception of their music in these countries were conducted. The research clarified that while Western musical theory has been taught as universal grammar in these countries, what kind of music is regarded as their particular national musical culture differs depending on each country's historical and social background. In the field of visual art education, Vietnam, Malaysia and China were also included in case studies and Fukuda's four-layer model of modern art was tested against each country's modern art and visual art education at school.

研究分野：比較教育、教科教育

キーワード：国民文化　アジアの芸術教育　学校教育　国民アイデンティティ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

1990 年代からの情報技術の発達によって、様々な分野でグローバル化が進んだ。文化においてもグローバル化が加速すると言われてきたが、その現象には大きく二つの側面があると言われる。一つは支配的な文化に各地の文化が収斂していく側面で、世界中で共通メニューを提供するハンバーガーチェーンになぞらえてマクドナルディゼーションなどと呼ばれた。一方、それに抵抗すべく、各地の独自の文化が自己主張を強めるという側面も文化のグローバル化にはあると言われており、実際 1990 年代以降、世界各地で独自の文化の維持が唱えられることが多くなっている。

また、グローバル化は情報や文化が国境を越えることを容易にしたが、学校教育に関しては今でも国家が管理者であり、決してその主導権を外国に譲り渡すことはない。よって、学校教育の中には、グローバル化時代の教育において自国民に身に付けさせる世界の普遍性と、自国の独自性を継承させるための教育の両方の要素が存在しており、その国がグローバル化の二側面のどこにバランスを求めて自国文化を形成しようとしているかが反映されていると考えられる。たとえば日本の 2008 年の学習指導要領では、現代社会に普遍的な知識・スキルとして英語や情報教育を進める一方で、日本の伝統や文化を重視した教育を推進することを掲げている。

このような理論背景のもと、石井と福田は学校芸術教育の実態によってその検証を試みてきた。本研究開始時に音楽教育においては台湾とシンガポールのアンケート調査は以前の科学研究費研究ですでに実施していたが、それぞれの教科書分析が残されていたほか、韓国とインドネシアに関しては全く新たに着手する必要があった。美術教育分野に関しては、本研究に着手するまでに、福田は東南アジアと東アジアの近代美術の四層構造（民族の伝統文化、西洋文化の影響、近代美術とデザインの国際様式、現代美術）を構想し、シンガポールを対象とした四層構造について研究発表を行っていた。そこで本研究では、四層構造モデルのアジアにおける普遍性を検証をすべく、インドネシア、ベトナム、韓国、台湾、マレーシア、中国を対象として加えることとした。

２．研究の目的

本研究の目的は、アジアの国々が学校教育をとおして国民文化として教えているものに、グローバル化と伝統文化がどのように反映されているのかを、複数の国の比較をとおして探求し、日本の学校における芸術教育への示唆を求めることである。グローバル化は変化し続ける近代化の延長であり、その変化の中のどの時点での近代を取り入れたかによって、その国への近代の影響は異なると考えられる。また、それぞれが国民文化として選択した文化には、その国の歴史や社会的背景の違いがあることが予想される。しかし、アジアの国として外から来た西洋文化を取り入れて消化し、自国の近代文化を形成していった点においては共通している。本研究では美術分野では福田の現代美術の四層構造モデル、音楽分野ではカムワンガマルの国民意識と言語のモデルを用いて各国の学校芸術教育とそれが生み出し

た国民文化を検証することを試みた。

３．研究の方法

研究の方法は、文献調査および対象となる各国における現地調査に分けられる。文献調査は現地調査に先立って対象国の歴史的・社会的背景および学校教育の状況を理解し、現地調査の際に入手すべき資料や美術館や教育機関等訪れるべき場所、インタビュー調査やアンケート調査のために接触すべき対象者を明確にするために行ったほか、現地調査によって得られたデータを分析する際のヒントを得るために、現地調査後も継続して行った。対象とした文献は、二次資料としての先行研究論文、書籍のほか、一次資料として教育省から出されている学校教育のカリキュラム、教科書等である。

現地調査は文献調査ではわからなかった点を明らかにすることを目的として行った。音楽教育分野に関しては、大学教員や学校教員へのインタビューと一部の対象国での学校の音楽授業参観、大学生もしくは大学卒業後間もない若者へのアンケート調査を実施し、それぞれの国の研究者、大学院生および大学生の協力を得て調査結果を分析した。美術教育分野に関しては、美術館や美術展での作品をとおした実態調査と現地での美術教育研究者や芸術家によるレビューによって、四層構造の検証を行った。

４．研究の成果

以下では、本研究の成果について音楽教育分野と美術教育分野に分けて述べていく。

音楽教育分野においては、国民文化としての音楽の要素として、歌の歌詞に用いられている言語の影響も考えられたため、多言語多民族社会である台湾、シンガポール、インドネシアの事例に関しては、カムワンガマルがシンガポールの言語と民族意識の分析に用いたモデルを当てはめた考察を行った。

台湾においては、普遍的な西洋音楽理論を教えるほか、国民党政権時代には音楽の歌唱教材の言語は中国語であり、大陸の多様な地域の民謡や国民党政権時代に作曲された現代曲などが教科書の主な内容であった。しかし、1990 年代の教育の台湾化を経て、独自の国民文化として教える内容は変化し、台湾の諸言語の歌や少数民族をはじめとする台湾独自の音楽文化によって独自性を主張している。日本統治時代の楽曲も含まれており、台湾の現代の音楽文化を形成する特徴としての日本の影響を否定してはいない。この点は、前回の科研研究で明らかになった、「台湾の音楽」として最も多くの人が回答したのが、日本統治下で西洋音楽を学んだ台湾人作曲家によって書かれた台湾語の大衆歌謡である点によっても支持される。

対照的に、韓国では日本統治時代以外の音楽に独自の音楽文化を求める傾向が見られる。1997 年の第 7 次教育課程改訂では伝統的な韓国音楽文化への理解に基づいた新しい文化の創造を掲げているが、21 世紀に入ってからも、2007 年の教育課程で伝統的な音楽の教材が40％を占めるなど、近代化前の伝統音楽や伝統楽器の演奏を学校音楽教育で積極的に教え

ている。大学生へのアンケート調査からは、「我が国の音楽」への上位 4 曲に「我が国の音楽」とみなされる要素の４つのパターンが示された。一つは日本統治時代の抗日のシンボルともいえる映画の挿入歌「アリラン」であり、二つ目は西洋で直接音楽を学んだ作曲家による「愛国歌」、三つ目は近年の YouTube の発展によって世界各国でヒットした大衆商業音楽「カンナムスタイル」、四つ目は近代以前の伝統的な民謡「カンカンソーレ」である。

シンガポールに関しては、英国植民地下の時代に移住してきた華人、マレー人、タミル人、そしてその他の民族が構成員であり、「国民なき国家」と言われてきた背景から、学校音楽教育は国民統合あるいは国民形成のための重要なツールとみなされてきた。1970 年代始めに政府によって編集された教科書『Sing and Enjoy』では、シンガポール人が作曲した歌をシンガポールの音楽文化として普及すべく掲載しており、同じ歌を英語、マレー語、中国語の３言語で併記している。このような試みは以降の教科書には見られないが、主要３民族の音楽文化を尊重すべく、華人、マレー人、タミル人コニュニティーの歌を必修とし続けている。この成果は前回の科研研究のアンケート調査で、大学生や教員が「シンガポールの音楽」への回答として、必修歌唱教材として学んだ自民族以外のコミュニティの曲も回答している点に現れている。21 世紀に入ってからの音楽教科書には英語歌詞の曲や欧米の大衆商業音楽の増加が見られ、グローバル化時代の経済戦略として、国が音楽にビジネスとしての伸びしろを求めていることが反映されている。

インドネシアに関しては、先行研究および教科書の分析から、社会全体の音楽文化および学校教育において西洋芸術音楽の存在が極めて希薄であることが明らかになった。これは、オランダによる統治時代に持ち込まれた西洋音楽が大衆商業音楽ジャンルに属するものであり、独立前後に書かれた西洋風の愛国歌も同様のジャンルのものであったことが大きい。また、鎖国をしていた日本と異なり、植民地時代に西洋の大衆音楽が各地に入り込んでおり、諸民族の伝統的な音楽にも影響を与えたと言われている。独立後のインドネシア政府は明治維新期の日本のように、自国の国民音楽文化に西洋芸術音楽の要素を取り入れる努力はしなかった。それぞれの民族語をもつ多様な諸民族コミュニティを一つの国家として統合すべく、力を注いだのはマレー語をもとに新たに作られたインドネシア語のナショナル・ランゲージとしての普及であり、音楽教育は長い間、インドネシア語歌詞をもつ愛国歌の歌唱にとどまっていた。政策が大きく変化したのは、前大統領ジョコ・ウィドド政権下の 2013 年ナショナル・カリキュラムの導入による。このカリキュラムでは、前述の愛国歌と各地の民謡を必修としており、民族を超えたインドネシアの音楽文化の学習という側面が見られる。この点において、カムワンガマルのモデルのように、インドネシア国民としてインドネシア語の愛国歌を学ぶ収斂の方向性と、各民族コミュニティの文化の維持としてそれぞれの地方の民謡を学ぶというコミュニティへの拡散の方向性が存在する。しかし、インドネシア国民として自民族以外のコミュニティの民謡も学ばせるという点では、シンガポール同様の国民形成の試みが見られ、国家の共有文化への収斂の方向性がより強くなったと考えることもできる。

次に美術教育分野では、最初に東南アジアと東アジアの近代美術の四層構造を構想し、シンガポールに引き続いて、インドネシアにおける四層構造を述べ、実態調査と現地でのレビューを実施した。ジョクジャカルタ州立大学のアンバルワティ教授によると、インドンネシアの近代美術は欧米の影響を大きく受けているのと独立後は政治的な影響によって美術表現が変化してきたことを指摘された。それらのことが美術教育にも反映して、教材の選定がなされたこともあるとのことであった。インドネシアは国土も広く、民族も多いのでそれぞれの地域に伝統的な美術、工芸が存在している。そこで、美術教育の教科書では、バティックや陶芸、木工、金工などの生活に密着した伝統的工芸については、それぞれの地域の典型的な作品を採り上げて、解説をしている。その上で、西洋美術の影響を解説している。そしてグローバル化した近現代の美術において、アファンディのようなインドネシアの独自性を表現しているものを述べている。つまり、四層構造の各層は繋がりながら独自性を生み出している。特に近現代の美術表現には社会や政治の変化が影響していることが明らかになった。

また、ベトナムの美術教育の教材を分析し、近代の四層構造との関係を明らかにした。ベトナムの美術教材は、歴史的建造物、伝統的工芸、伝統的文様を基礎として、その上に西洋画や伝達デザインを受容し、作品制作としてはベトナムの独自性を表現するために、モチーフにベトナムの伝統的な表現を採り入れている。この教材構成は大幅な変更はなく、2013 年以降の改訂では、教材の構造よりも、資質・能力の育成のために、教育方法に児童生徒の主体的学習を重視していることが明らかになった。

東アジアについては、台湾と韓国の近代美術の構造を明らかにした。韓国の四層構造については、淑明女子大学の金香美教授、韓国外国語大学名誉教授の金鍾徳にレビューを受けた。金香美によると、この四層構造は近代の基礎が伝統美術と日本と欧米による影響を整理できているとのレビューを受けた。更に金鍾徳によると伝統文化と欧米文化との関連を明示したこの四層構造は、近代文学の分野にも適応できるとのレビューを受けた。

台湾の四層構造については、台北教育大学名誉教授の林曼麗、東華大学林永利教授、東海大学教授の李貞慧からレビューを受けた。林曼麗によると戦後の台湾は政治的な影響が強いので、そのことを加味する必要があるとの指摘を受けた。林永利からは近代美術の整理がよくできているとの評価を得た。また李貞慧によると台湾での日本画の位置づけも含まれているので、概ねこの構造で良いとのレビューを受けた。

さらに中国の近代美術の四層構造については、中国からの留学生等から意見を聴取した結果、簡潔でまとまっているとの意見を得た。しかし、中国の美術教育については諸般の事情により、実態調査を実施していないので今後の検討課題である、

以上が本研究での成果である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計19件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　6件／うちオープンアクセス　17件）

１．著者名 福田隆眞	４．巻 55
２．論文標題 インドネシアにおける中学校美術教育と独自文化形成について	５．発行年 2023年
３．雑誌名 大学美術教育学会「美術教育学研究」	６．最初と最後の頁 257-264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 福田隆眞・石井由理	４．巻 55
２．論文標題 インドネシアにおける芸術教育と文化形成について：前期中等教育を中心として	５．発行年 2023年
３．雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	６．最初と最後の頁 77-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石井由理	４．巻 72
２．論文標題 近代化と国民文化形成における音楽教育の役割	５．発行年 2023年
３．雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	６．最初と最後の頁 95-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 福田隆眞	４．巻 54
２．論文標題 アジアにおける近代美術の構造と美術教育	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大学美術教育学会「美術教育学研究」	６．最初と最後の頁 281-288
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 福田隆眞・ター タン フェン・佐々木宰	4．巻 52
2．論文標題 ベトナムの美術教育における新しい教育方法について	5．発行年 2021年
3．雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6．最初と最後の頁 101-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 ISHII, Yuri, Dewi Pangestu Said, Putu Ayu Asty Senja Pratiwi	4．巻 71
2．論文標題 Localization, Nationalization, and Globalization Reflected in the Music-listening Habits of Young Balinese	5．発行年 2022年
3．雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6．最初と最後の頁 127-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 石井由理・プトウ アユ アスティ センジャ プラティウィ	4．巻 71
2．論文標題 国民文化形成とローカル・アイデンティティ：バリの若者の音楽認識から見えるもの	5．発行年 2022年
3．雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6．最初と最後の頁 119-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 福田隆眞	4．巻 50
2．論文標題 美術教育実践のための近代美術の四層構造について：アジア地域を事例にして	5．発行年 2020年
3．雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6．最初と最後の頁 357-364
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 福田隆眞・金香美	4．巻 76
2．論文標題 美術教育の領域としての近代美術の四層構造についてー日本と韓国を事例としてー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 韓国造形教育学会誌	6．最初と最後の頁 193-207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 石井由理	4．巻 70
2．論文標題 バリの大学生への質問紙調査に見るインドネシアの音楽	5．発行年 2021年
3．雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6．最初と最後の頁 101-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 福田隆眞・金香美	4．巻 49
2．論文標題 韓国の近代美術と美術教育実践のための構造について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6．最初と最後の頁 29-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 福田隆眞	4．巻 48
2．論文標題 インドネシアにおける美術教育実践のための基礎研究 ： 近代美術の四層構造と「インドネシアの世界精神」展	5．発行年 2019年
3．雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6．最初と最後の頁 229-237
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yuri Ishii	4．巻 5(2)
2．論文標題 The roles played by a common language and music education in modernization and nation-state building in Asia	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Espacio, Tiempo y Educacion	6．最初と最後の頁 55-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14516/ete.221	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石井由理	4．巻 68
2．論文標題 韓国の音楽教育と国民アイデンティティ	5．発行年 2019年
3．雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6．最初と最後の頁 127-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 福田隆眞	4．巻 46
2．論文標題 シンガポールにおける近代美術の四層構造と美術教育	5．発行年 2018年
3．雑誌名 教育実践総合センター　研究紀要	6．最初と最後の頁 209-217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 王宇鵬・福田隆眞	4．巻 47
2．論文標題 美術文化の四層構造から見る台湾近代美術　彫刻家黄土　水を例として	5．発行年 2019年
3．雑誌名 教育実践総合センター　研究紀要	6．最初と最後の頁 201-209
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 石井由理	4．巻 67
2．論文標題 台湾の音楽教科書にみられるナショナル・アイデンティティーと文化的多様性	5．発行年 2018年
3．雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6．最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石井由理	4．巻 45
2．論文標題 音楽教科書から見たシンガポールの国民文化形成	5．発行年 2018年
3．雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6．最初と最後の頁 129-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 福田隆眞	4．巻 44
2．論文標題 アジアにおける近代美術の四層構造と美術教育	5．発行年 2017年
3．雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6．最初と最後の頁 143-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 Yuri Ishii
2．発表標題 Reconstructing Modern National Identity in Music: Case Studies of Korea and Taiwan
3．学会等名 35th World Conference of International Society for Music Education（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 Yuri Ishii
２．発表標題 Music education and national identity in Asian countries: An investigation of government views and people’s perceptions of national music
３．学会等名 33rd World Conference of International Society for Music Education（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yuri Ishii
２．発表標題 National identity and cultural diversity in music education at school
３．学会等名 Hong Kong Educational Research Association International Conference 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yuri Ishii
２．発表標題 Music Education and the Meaning of Cultural Diversity in Changing Modernity
３．学会等名 36th World Conference of International Society for Music Education（国際学会）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計3件

１．著者名 石井由理、熊井将太、金鍾徳、胡令遠、ソムチャイ・チャカタカーン、林呈蓉、陳慎慶、山本冴里、鷹岡亮、北沢千里、田中理恵、森下徹	４．発行年 2020年
２．出版社 渓水社	５．総ページ数 200
３．書名 成長するアジアにおける教育と文化交流	

1．著者名 福田隆眞,金子 一夫，赤木 里香子，長瀬 達也，牧野 由理，山田 一美，有田 洋子，三澤 一実，新関 伸也，和田 学，大泉 義一，立原 慶一，石﨑 和宏，王 文純，上山 浩，栗山 裕至,福本 謹一， 新井 哲夫，宇田 秀士，岡崎 昭夫 他	4．発行年 2019年
2．出版社 美術研究出版	5．総ページ数 233
3．書名 美術教育学叢書②　美術教育学の歴史から	

1．著者名 福田隆眞、福本謹一、東良雅人、 村上尚徳、 山田芳明	4．発行年 2024年
2．出版社 建帛社	5．総ページ数 184
3．書名 美術教育の基礎	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	福田　隆眞 (Fukuda Takamasa) (00142761)	山口大学・その他部局等　・名誉教授 (15501)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関